

X 2025年度 小論文

法学部

問題冊子 (1～2ページ)

注意事項

- (1) 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見ないこと。
- (2) 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に申し出ること。
- (3) 解答は別に配付する解答用紙に正しく記入すること。また、解答に関係のない語句・記号・落書き等は解答用紙に書かないこと。
- (4) 解答用紙上部の受験番号欄・氏名欄に受験番号と氏名を記入すること。
- (5) 問題冊子の余白等は適宜使用してもよい。

次の設問に答えよ。

2022年6月に刑法が改正され、拘禁刑が2025年6月1日から始まる。

関連する新聞記事①～③を読んで、問1～3に答えなさい。

*【 】は記事タイトル

新聞記事① 2022/06/13 西日本新聞 タ刊 1ページ

【「拘禁刑」成立，更生重視へ】

刑罰の懲役と禁錮を廃止し「拘禁刑」に一本化する改正刑法などが13日、参院本会議で賛成多数により可決、成立した。懲役受刑者に科されていた刑務作業が義務でなくなり、改善更生に向けた指導や教育により多くの時間をかけることが可能となる。施行は公布から3年以内。刑罰の種類が変更されるのは、1907（明治40）年の刑法制定以降初めて。

現行法の刑罰は死刑、懲役、禁錮、罰金などがあり、懲役は木工や洋裁などの刑務作業を義務とする。現在でも、薬物依存や性犯罪の懲役受刑者の一部は改善プログラムなどを受けているが、刑の一本化により、作業義務に縛られずに指導できるようになる。

新聞記事② 2023/08/26 毎日新聞 東京朝刊 25ページ

【受刑者呼称「やつら」→「○○さん」 名古屋刑務所、今月から 暴行問題受け】

名古屋刑務所の刑務官が受刑者に暴行や暴言を繰り返した問題を受け、名古屋刑務所は8月から受刑者を「さん付け」で呼ぶ取り組みを始めた。6月に公表された法務省の再発防止策に、受刑者を蔑視する不適切な呼称を直ちに禁止すると盛り込まれていた。

名古屋刑務所では2021年11月～22年9月、若手刑務官22人が40～60代の男性受刑者3人に計419件の暴行や不適切処遇を繰り返していたとされる。

名古屋刑務所の刑務官らは受刑者を「懲役」「やつら」などと呼んでいたといい、有識者でつくる第三者委員会は「人権意識が希薄だ」と問題視。上下関係が固定しやすい呼称の廃止を課題に挙げ、受刑者を呼び捨てにする慣行について見直しを求めた。

提言を受け、法務省がまとめた再発防止策では、規律・秩序を過度に重視する組織風土を改めるため、受刑者を蔑視する呼称は直ちに禁止し、呼び捨ても見直しを検討するとしていた。

関係者によると、名古屋刑務所には暴力団加入歴のある受刑者が一定数おり、現場から「規律が保てない」との懸念も示されたという。ただ、既に全国の女子刑務所で「さん付け」呼称を始めていた上、問題を起こした刑務所が率先して行動に移そうと、8月から試行的に始めた。目立ったトラブルはないものの、呼び捨てに慣れた一部の受刑者からは『「さん付け」なんてくすぐったい』との声も上がっているという。

法務省は25年から導入される「拘禁刑」を見据え、処遇の見直しを進めている。受刑者の呼称については今後3年以内をめどに各施設で議論を進め、意見を集約する方針。

（飯田憲）

【刑務所、受刑者に「さん付け」 塙の内外を近づける契機に】

立場にかかわらず、お互い「さん付け」で呼びましょう——。どこかの会社の話ではない。この4月、全国の刑務所で受刑者の呼び方が変わった。

これまでは名字呼び捨てが一般的だった。受刑者から「先生」や「オヤジ」などと呼ばれていた刑務官も「さん」に。「ガリ」(散髪)といった刑務所独特の隠語の使用も禁止した。

2022年に発覚した名古屋刑務所の受刑者暴行問題を受けた再発防止策の一環だという。世間の関心も高く、SNSなどに「犯罪者を甘やかすのか」といった批判があがった。現場の反応はどうか。

「特にベテラン職員に否定的な声があったのは事実」。収容定員約2700人。日本最大規模の刑務所、府中刑務所(東京都府中市)の櫛引唯一郎処遇部長が明かす。同刑務所は先んじて3月半ばに変更した。

事前に研修を重ね、導入の狙いを繰り返し話し合ったという。その狙いとは職員の人権意識を高めること。そして出所後のスムーズな社会復帰だ。「社会では『さん付け』が当たり前。刑務所内の環境を外に近づける狙いもある」(櫛引部長)

呼称だけで意識が変わるわけではない。刑務所での勤務経験がある龍谷大学の浜井浩一教授(犯罪学)は「管理する対象でなく、一人の人間として受刑者と向き合うきっかけにしなければならない」と説く。

変革の先には来年6月に控える拘禁刑の導入がある。「懲らしめ」ではなく「立ち直り」に重きを置き、一人ひとりの特性などに応じた処遇を充実させる。その結果再犯を防ぐことができれば、社会の利益になるとの考え方が根底にある。

府中刑務所の内部を案内してもらった。

数十人が黙々と縫製作業をする部屋の隣で、数人の高齢男性がリハビリを受けていた。単独室で折り紙をする受刑者は認知症が疑われるという。日本人受刑者の15%が70歳以上で、最高齢は94歳(23年末時点)。障害を持つ受刑者もいる。

受刑者同士のいさかいなどトラブルはいまもしばしば起きる。刑務所内の規律維持が重要であることは変わらないが、高齢化などに伴い社会復帰の重要性が増している。出所後の生活支援を自治体と話し合ったり、外部の専門家を招いて認知症の知識を学んだりする機会が増えている。

刑務所関係者から、きめ細かな対応をするにはマンパワーが不足しているとの声も聞く。浜井教授によると、イタリアでは刑務所内に多数のボランティアを受け入れ、運営をサポートしているという。「もっと外部の力を生かすことも考えるべきだ」と訴える。

刑務所は長い間、高い塙を挟んで外の世界から隔離された存在だった。だが、再犯防止は「塙の中」だけでは完結しない。呼称の見直しは、刑務所と社会の関係を新たにする一歩になるだろうか。

(石川淳一)

問1 拘禁刑導入の目的は何か、100字程度で述べなさい。

問2 刑務所での「さん付け」の取り組みがどのように進められてきたか、時系列で整理して簡潔に記述しなさい。

問3 刑務所内の受刑者の処遇はどうあるべきか、意見を述べなさい。

*解答に際しては、問1～3のいずれの問いに対する解答かをはじめに明記すること。

*解答の順は問わない。